

金鉏岡長谷の百枝槻の構想

長 野 一 雄

一

雄略記には金鉏岡と長谷の百枝槻の二つの歌語りが、「又」の表記で続けて記載してあるが、その構想が理解しにくい。また長谷の百枝槻は三つの部分からできているが、その構想も理解しにくい。金鉏岡の説話を別箇の一話とみるのか。後話と内的関連があるとみるのか。長谷の百枝槻の歌語り群で、最後に位置する天皇の歌と袁杼比売の歌が、しっくり呼応しない感があるのはどうか。金鉏岡の話で求婚対象の袁杼比売の名が出て、完結せずにしぼしとんだ形で、長谷の百枝槻の最後にまた袁杼比売の話が出る構成をとるのはどうしてか、といった疑問がつきまとうのである。

金鉏岡のいなび妻説話を別箇の一話とみると、雄略天

皇が春日の袁杼比売を求婚して逃げられるだけで終るのは、話としてまとまりがなく、いかにも尻切れとんぼの感がある。長谷の百枝槻の最後にもう一度袁杼比売が出るから、金鉏岡と長谷の百枝槻を一連とみて、冒頭から結末へ何らかの内的関連があるとみるにしても、その内的関連の発見が容易ではない。

長谷の百枝槻の最後に置かれている袁杼比売の歌は、その前の天皇が袁杼比売に呼びかける歌とも内的関連があるとしたいが、その関連も容易に発見できない。といって関連がないとすると、最後の袁杼比売の歌が唐突すぎて変である。

こうした金鉏岡・長谷の百枝槻の構想について、居駒水幸や本田義寿の論がある。³⁾居駒は金鉏岡の段をⅠ、長谷の百枝槻の内、天語り歌三首の段をⅡ、天皇と袁杼比

売の唱和の段をⅢとし、「この不自然な構成は、紛れもなくⅠとⅡⅢを区別する意識」があるからとし、ⅠⅢⅡの順の方が構想として自然と考え、そのようにならなかつたのは「動かし難い程にⅡⅢがまとまっていた」からで、「それはすなわち、ⅡⅢの天語歌・宇岐歌・志都歌が豊楽の歌謡として記録された状態以外に考えられない」としている。これに対して本田は、金鉏岡と長谷の豊楽の場面は別のものではなく、雄略と袁杼比売とを主題として一貫するものと考えており、ⅠⅡⅢを一連のものとしてとらえていて、意見は対立している。

『記』の編者は、天語歌・宇岐歌・志都歌を豊楽の歌謡として一連に並べるといふ形式を重んじ、歌謡りとしての興趣を軽視したと考えるべきだろうか。他の天皇記で歌謡名の記されている箇所、例えば允恭記の軽太子と衣通王の歌謡りをみると、志良宜歌・夷振の上歌・宮人振・天田振・夷振りの片下ろし・読歌とつきつぎに紹介されるが、全体は一連の物語りとしての興趣をもち、不自然ということがない。このことは、他の天皇記でもいえることなので、『記』の編者は歌謡りを記すとき、話の内的関連を考慮していると判断できそうである。伝承の段階ですでにそうなっていたのかどうかも問題であるが、歌謡名の紹介は『記』の編者の作業である

から、『記』に記載の段階で内的関連をも考慮したと考えてよい。

かりに、居駒の意見を是認して、ⅡⅢが「豊楽の歌謡として記録された状態」を示しているとしても、そのことをもって『記』の編者の意図した内的関連を無視してもよいことにはならない。『記』の編者は豊楽の歌謡として記録しながら、なんらかの意図にもとづく構想をもって、この一連の歌謡りを形象したと考えるべきである。そうした文学的意識がなかったとすると、『記』はもっと形式的な味気ない書物になっていたのではないだろうか。やはり、書かれた文章の背後に隠れている意図や理念を読みとるべきなのである。

構想の不可解な金鉏岡・長谷の百枝槻の段を前に、こう考えて一連を吟味すると、そこには一筋の精神が貫流しているように感じられてくる。先記した本田義寿の論では、金鉏岡・長谷の百枝槻を一連のものにとらえた上で、「収穫感謝祭的儀礼であり、聖婚を含む予祝儀礼であった」ととらえていて、合意できる点はあるが、『記』の編者の構想意図をからめて追究するに至らない点で、私には満たされないものがある。

私見では、一連のいずれもが聖性に満ちた寿詞の精神をもち、その精神をバックボーンに、新嘗祭の豊楽の節

会を頂点として、起承転結の構成が作用して作られており、その構成で説き示したい意図があるように思うのである。こう考えるので、私は『古代歌謡全注釈』（以下『全注釈』で表記）が歌を生かそうとするあまり、歌語りとして構成が「ちぐはぐ」だという意見に賛成でない。私見では一貫した構想が機能していると思うのであるが、その解明に努めたい。

二

また、天皇、丸邇の佐都紀の臣の女、袁杼比売を婚ひに、春日に幸行しし時、媛女道に逢ひき。すなわち、幸行を見て、岡の辺に逃げ隠りき。かれ、御歌を作よみたまひき。その歌に曰りたまひしく、
媛女の い隠る岡を 金鉏も 五百箇もがも
鉏あきはぬるもの

かれ、その岡を号けて金鉏岡といふ。

雄略紀に、春日和珥臣深目の娘、童女君を妃とした記事があり、元は采女だったと記す。史実の背景を考えても無駄だから、雄略天皇がワニ氏の娘に求婚し、娶った話が隠び妻形式の説話になったものとみられる。『記』に袁杼比売とあり、『紀』に童女君とあるが、袁杼比売は弟姫らしく思える。『肥前風土記』松浦郡褶振峯説

話のヒロインは弟日姫子という神女であり、一方雄略記の吉野童女が同じく神女らしく思えることからすると、袁杼比売と童女君は『記伝』が同人かとも、『全注釈』が別人とするが、かりに別人とみても、春日の神に仕える巫女だったと考えることはできる。神女だから、天皇の求婚に際していなび妻の話が生まれやすかったのではなからうか。多田一臣は折口信夫の意見を参考に、「いわゆるナビツマ伝承に代表される逃げ隠れする花嫁の存在は、沖繩久高島の『妻もとめ』の習俗をながめることによってもしかめられるが、こうした逃走婚の形式が必要とされたのは、それによって神との仲らいの絶えることを惜しむためであったという」と記している。神女ゆえに、いなび妻となることが必要とされるのだ。イナブとは神の許しをえるための通過儀礼のようなものであろうか。

この説話は地名説話と同形式の様式をもち、『播磨風土記』賀古郡比礼墓のいなび妻説話が、地名説話の形式でまとめられているのと似ている。地名説話の形式をとるのは、それが聖性を帯びた地であることを示しているのであって、話が一種の寿詞のようになっていのである。地名は元來神のことはぎを受けたものだからそうなる。阪下圭八は、この比礼墓のいなび妻説話が地名説話

としてもつ性質を、「地名は、いずれも儀式的なものばかりであり、この婚姻がふつうの婚とはちがう聖なる婚姻である所以を示すものであろう」とし、さらに「天子求婚説話における逃走と追求のモチーフは、このように成年式試練を独立に要約した聖婚儀礼の実習にもとづく」とみてよいであろう」と記している⁵⁾。天子のいなび妻求婚が、聖婚儀礼の性質をもつものとする、雄略記の金鉏岡説話のもつ意味が、後の説話を含めた構成とあいまって、考えやすくなる。岡の辺に隠れた女を捜し出すのに、「金鉏も五百箇もがも、鉏きはぬるもの」と歌うが、金鉏で鉏くというやや解せない表現は、理屈よりも聖性を重視した呪的言語であると理解すべきだ、ということになる。歌そのものが呪的な寿詞だと考えたい。宮岡薫は『記』に表現された多くの用例から、「五百」と「鉏」の結びつきが国土支配にかかわっている点に注目し、「五百」は数の多さをいうだけではない呪的数値であり、「鉏きはぬる」という表現は「鉏」の呪的機能と相關関係にあると考え、女性を鉏きかえされたうねと同一視して、それは男性生殖器和鋤とを、耕作と生殖行為だと考えて同一視するもので、結局この歌は「農耕呪術の本質的な実習である、生殖行為に予祝呪術の基本原理を表現しているものであると思われる」と記している⁶⁾。

いなび妻との聖婚が、豊穰を予祝する感精呪術の儀礼であり、この歌がまさに予祝呪術としての生殖行為を暗示しているとする、この金鉏岡の説話は新嘗祭における天子の営みを語っていると考えられることができる。いなび妻との聖婚は天子の通過儀礼のようなものであって、その聖婚を経て、豊楽の宴が行なわれることは、祭式のあり方に則した展開となる。すなわちⅠの金鉏岡の説話から、Ⅱの長谷の百枝楓の三重の采女の歌への展開は、祭式のあり方に則した構成ということができ、この段が予祝的寿詞のような役目を果たすことになっているのである。

こうした観点に立つと、金鉏岡のいなび妻説話が、『播磨風土記』賀古郡比礼墓のいなび妻説話のように、求婚する女性との聖婚をなしとげるところまではいかず、女性を捜そうとするところで終って尻切れの感があるのは、構成上自然なように思われる。つまり聖婚はもはや予測される自明のことなのである。中西進が、袁杼比売との求婚譚は「現在の形より多くの歌を含んだ豊かな話だったのに、それが現古事記では欠落してしまっている」と見たい⁷⁾と記すことに同意したい。元はワニ氏が天皇家に服属し、縁戚関係をもったことを語る伝承で、逃げた袁杼比売を捜し出して聖婚に至る一連のいなび妻

説話だったと思われる。話の後半を欠落させたのは、『記』の編者の構想上の作意だったとみたい。

三

また、天皇、長谷の百枝槻の下に坐しまして、豊明したまひし時、伊勢の国の三重の嫫、大御蓋を指挙げて献りき。ここにその百枝槻の葉、落ちて大御蓋に浮かびき。その嫫、落葉の蓋に浮かべるを知らずて、猶大御酒を献りき。天皇その蓋に浮かべる葉を看行はして、その嫫を打ち伏せ、刀をその頸に刺し充てて、斬らむとしたまひし時、その嫫、天皇に白して曰ひしく、「吾が身をな殺したまひそ。白すべき事あり」といひて、すなはち歌曰ひしく、

纏向の 日代の宮は 朝日の 日照る宮 夕日の
日がける宮 竹の根の 根垂る宮 木の根の 根
蔓ふ宮 八百土よし い築きの宮 真木さく 松
の御門 新嘗屋に 生ひ立てる 百足る 槻が枝
は 上枝は 天を覆へり 中つ枝は 東を覆へり
下枝は 鄙を覆へり 上枝の 枝の末葉は 中つ
枝に 落ち触らばへ 中つ枝の 枝の末葉は 下
つ枝に 落ち触らばへ 下枝の 枝の末葉は あ
り衣の 三重の子が 指挙せる 瑞玉蓋に 浮き

し脂 落ちなづさひ 水をろこをろに こしも
あやにかしこし 高光る日の御子 事の語り言も
こをば

かれ、この歌を献りつれば、その罪を赦したまひき。ここに大后歌ひたまひき。その歌に曰ひしく、
倭の この高市に 小高る 市の高處つかま 新嘗屋に
生ひ立てる 葉広 ゆつ真椿 その葉の広り坐し
その花の照り坐す 高光る 日の御子に 豊御酒
献らせ 事の 語り言も こをば

天語歌二首である。天語歌はもう一首あるが、二首で切ったのは、二首共に新嘗屋に生い立つ聖なる木の繁茂にかこつけて、王権の繁栄をたたえる点で、同じ観点に立つからである。

一首目は、百枝槻の葉が散って天皇の杯に浮んだのを知らずに、三重の采女が御酒を奉ったので、その無礼に憤った天皇が采女の首を斬り殺そうとしたとき、采女の歌によって天皇の怒りが解け、罪を許した話である。

臣下の無礼に憤り、殺そうとした天皇が、臣下の歌によって怒りを解き許す話は、雄略紀に二話ある。

一は、木工鬮鶏御田が伊勢の采女を犯したと天皇が疑って殺そうとしたのを、秦酒君が弹琴して歌ったのを聞き、罪を許す話である。

神風の 伊勢の 伊勢の野の 栄枝を 五百経る
析きて 其が尽くるまでに 大君に 堅く 仕へ
奉らむと 我が命も 長くもがと 言ひし工匠は
や あたら工匠はや

是に、天皇、琴の声を悟りたまひて、その罪を赦し
たまふ。

天皇に長く忠誠を尽そうとした工匠の心を、歌で悟り
罪を許すことになる。

二は、木工章那部真根が斧で木を削る自分の技術を誇
るのを不快に思い、采女にふんどしをつけて相撲をとら
せ、これに見とれて木を置く石台に斧を当て、刀を傷つ
ける失敗を犯した章那部を殺そうとしたとき、仲間の工
匠が歌った歌で、

あたらしき 章那部の工匠 懸けし墨縄 其が無け
ば 誰か懸けむよ あたら墨縄

とあり、天皇は章那部のすぐれた技能を失うことの非を
悟り、罪を許すことになる。

いずれも、歌によって工匠の立派なことを教えられ、
自己の非を悟る話である。

三重の采女の歌ったことになっている天語歌は、聖性
を帯びた木の葉が杯に浮ぶことのためたさを暗に諭しな
がら、天皇への非礼を詫びるという、二つの機能をもた

せた巧みな歌で、これによって天皇は采女を許すことに
なる。『全注釈』がいうように服属の意味をもつ話かも
知れないが、それだけではない。天子が歌に教えられて
いる面にも注目したい。次の大后の歌が、勸酒歌とはい
え天皇をたたえているのは、天皇が三重の采女を許した
度量の大きさをふまえてのものである。このことは、雄
略紀の葛城山の説話で、猪を殺すことができず逃げた舎
人を、天皇が殺そうとしたとき、皇后のいさめで許した
ときの天皇の姿と類同して、度量の大きい天子像を語っ
ているのである。『全注釈』のいう「忠誠誓約的意義」
だけではないとりたい。『全注釈』はこのようなとり方
をするので、大后の次の天皇の歌が突然大官人のことを
歌うのを含めて、この一連の歌語りがどうしても「ちぐ
はぐ」なものに思えるのではなからうか。後述するが、
私見によると、歌語りとして少しもちぐはぐではないの
である。

歌は、雄略朝の長谷の百枝槻なのに「纏向の 日代の
宮は」と、景行朝のこととして歌い出されることに、従
来から関心がもたれてきた。景行天皇の日代の宮にあっ
た名高くめでたい槻の大樹に長谷の百枝槻をなぞらえ作
ったとする意見（『記伝』『評釈』）、景行天皇の宴楽での
三重の采女の歌物語と、雄略天皇の同じ人物の歌物語と

が、似ているので混乱したという意見（『新講』）、怒って殺そうとし、歌の徳により助けられる話なので、武勇の君と伝えられる雄略天皇に仮託されるに至ったという意見（『全講』）、宮延寿歌がいったん景行天皇に起源を求めて物語化された後、雄略天皇の話に改められたという意見（『全注釈』）、景行天皇讚美の寿歌が、雄略天皇に関する物語に採り入れられたため、物語と歌謡との間に矛盾を生じたという意見（『古事記全注釈』）、天語歌は海人族の天語連により伝承されたもので、景行朝に服属したと伝えられる阿曇氏が、纏向の日代の宮を称える宮延寿歌を奏して、景行天皇にゆかりを求めた歌が、伊勢の阿曇系海人集団に伝えられていたという意見（次田真幸説）、天語り歌を雄略天皇の事蹟に結びつけて説いたため、物語との間に矛盾を来している。「長谷の朝倉の宮は」とあるべきだという意見（『古事記全講』）などがある。

次田真幸の意見が、歌の起源と伝承について説得力をもつが、有名な歌謡は元の歌われた時や場を越えて、普遍的に伝わり愛唱され、変化しつつも定着することがあると考えられるので、景行朝にことよせて作られた歌が伝承され、一部変化しつつ『記』に定着したと考えておきたい。有名な歌を享受し伝承する人々にとつて、歌の中の時代や場所は問題でなくなっているのである。雄略

記の引田部赤猪子の歌語りで、赤猪子が前歌で「御諸につくや玉垣」と歌いながら、すぐ次の歌で「日下の入江の蓮」と、全然違う土地をいうのもそれである。有名な歌謡は皆そうではないか。

纏向の日代の宮が、日の恵みを豊かに受ける、強固な地盤の上に築いた宮であることを、たたえることから出発した歌は、新嘗屋に生い立つ聖なる百枝楓の上中下の枝が、天や東西の国を覆って繁茂している様をいつて王権の繁栄をたたえ、その枝葉が上↓中↓下の枝へ順次落触すること、『全注釈』が指摘するように楓の葉のマナが次第に蓄積されていき、もっともマナに富んだ下枝の葉が酒杯に落ちて浮かぶことよつて、酒が一層マナに富んだ飲物になるし、それを飲む天皇が強いマナを身に帯ずることになるわけで、そのためたさを国土創成神話の古事にかけて歌うのである。勸酒の寿歌であるうが（『全注釈』『評釈』）、王権讚美の寿歌ともなっており、呪力のこもった張りのある表現ともあいまって、すぐれた天語歌である。結局、この歌は天皇の聖性を寿ぐ役目を果しているのである。

次の大后の歌は、歌に感じて采女の罪を許した聖なる天子に向けてのもので、新嘗屋に生い立つ聖なる五百箇真椿の広い葉のように度量が大きく、花のように輝やか

しい天子に「豊御酒献らせ」と歌う。明らかに勸酒歌であるが、聖なる木にかこつけてめでたく天皇の聖性を讃美している。

この歌は、大后石之比売が八田若郎女に心ひかれる天皇を、しので歌う仁徳記の歌と後半が似ている。

つきねふや 山代河を 河上り 我が上れば 河の

辺に 生ひ立てる 鳥草樹を 鳥草樹の木 其が下

に 生ひ立てる 葉広 五百箇真椿 其が花の 照

り坐し 其が葉の 広り坐すは 大君ろかも

呪性の強い後半の「生ひ立てる」以後の中心部の表現を生かして、歌が作り変えられる姿を想定できるが、末尾にくるのは大君であり、日の御子であって、主君を讃美することにおいて変りなかったのだろう。特に対句の部分に呪性の強くもった歌であるから、前歌ともども、聖なる木の聖性を強く賦与されることを祈念する心がこもっているとみられる。

こうして天語歌二首は、王権の聖性を寿ぐ意味をもつ点で、構成上二首一組とみることができる。

三重の采女や大后が、王権の聖性をたたえる前二首に對し、次の天語歌は天皇が歌うことになっている。歌手が変る上、内容上も、豊樂の宴の奉仕にいそしみ、聖なる御酒にひたって歓樂する臣下を天皇が歌う点で、前二

首の承句を転じたものとみることができる。『記』の編者は、転句の働きをねらったのではなからうか。

もしきの 大宮人は 鶉鳥 領巾取り懸かけて

鶉まなほしら 尾行き合へ 庭雀 うずすまり居て 今日も

かも 酒みづくらし 高光る 日の宮人 事の 語

言も こをば

歌は、三種の鳥、鶉・鶉鳥・庭雀を、大宮人の動作の比喩に用いているのが特徴的である。鶉鳥はセキレイとされるが、神代紀岐美二神の段の一書に、「時に鶉鳥有りて、飛び来りてその首尾を揺す。二の神、見して学ひて、即ち交の道を得つ」とあり、豊穰の聖なる鳥のように思われる。鶉は適例がないが、雀は神代記天若日子の段で「すなはち、其処に喪屋を作りて、河雁を岐佐理持とし、鶯を掃持とし、翠鳥を御食人とし、雀を稚女とし、雉を哭女とし、かく行ひ定めて、日八日夜八夜を遊びき」とあり、米つき女とされていて、豊穰のイメージと結びつく。この点を敷衍して考えると、諸説が指摘することはないが、鶉鳥は卵をよく生み、鶉鳥は性交の所作をよくし、庭雀は数多く群がって穀物をつつく、といったことから、三種の鳥は聖なる豊穰の意味をもつのではなからうか。証拠は乏しいがそう考えたい。

さらに「うずすまり居て 今日もかも 酒みづくら

し」は、「うずすまり」と「酒みづくらし」が、用例の乏しさから意味の確定が難しいが、「うずすまり」は庭雀の比喩の關係から大官人が大勢集まっていることは確實だし、「酒みづくらし」は『新解』『全講』のいう「酒水漬く」がいいようで、酒にひたっている様と思え、大勢の官人が聖なる御酒の豊かな恵みを受けて、福寿を予祝するめでたさがある。『全注釈』や『評釈』が「宮廷寿歌」として、元歌を想定する限りそうなるうが、宮廷寿歌ということに引きづられて考えたと、歌語りとしての理解が行き届かなくなるきらいがある。『記』の編者は、元歌を離れ、あくまで歌語りとして再構成しているのである。そういう観点で考えると、天皇が豊樂の宴に奉仕し恵みにあずかる臣下の姿に目を向け、王権の繁栄に満足する心を歌っているものと、天皇に目を向けていた前二首から、臣下にも目を向けて、主君と臣下の両側から聖なる宮の繁栄を歌い、王権を讚美することになっているのである。こうして承句から転句への展開は、決してちぐはぐではなく、むしろ巧妙に構成されているといえよう。

四

Iを起句とし、IIを承句とし、IIIを転句とすると、IV

は結句となる。

この豊樂の日、亦春日の袁杼比売、大御酒を献りし時、天皇歌曰ひたまひしく、

水灌ぐ 臣の嬢子 ほだり取らすも ほだり取り
堅く取らせ した堅く や堅く取らせ ほだり取
らす子

とうたひたまひき。こは宇岐歌なり。ここに袁杼比売、歌を献りき。その歌に曰ひしく、

やすみしし わが大君の 朝とには い倚り立た
し 夕とには い倚り立たす 脇机が下の 板に
もが あせを

といひき。こは志都歌なり。

天皇の歌は、御酒をつぐ袁杼比売に、粗相なきようほだりを堅くしっかりと持ちなさいと注意している。『全注釈』のいう勸酒歌だろうが、果してそんなとり方だけでよいのか。そのとり方だけをする、後の袁杼比売の答歌とそれこそちぐはぐで、私には大いに疑問がある。

「ほだり取り 堅く取らせ した堅く や堅く取らせ」と、堅くを三度もすぐ続けてくり返すところが、いかにもいわくありげである。

ほだりは他に用例がなく明確でない。すぐ前に「春日の袁杼比売、大御酒を献りし時に」とあり、酒の容器で

あることは分かる。諸説は、酒器(記伝、評釈、古事記新講、古事記全注釈)、酒瓶(新解、全講、古事記全講)、柄杓または柄杓型の銚子(全注釈)、徳利(古事記評釈、古典大系本、古典文学全集本)、酒壺(古典集成本、思想大系本)とする。『古事記全注釈』は吉田金彦説として、ほだりは紐のことで「絆を取る」とする意見を記し、同時に吉田が、直木孝次郎説として男根と取る意見をあげていると紹介している。原意は判定しにくいから前後の文脈から考えると、「した堅く、や堅く取らせ」というから、少し重いものとみて酒壺の方がよいかも知れない。しかし「堅く」「した堅く」「や堅く」というのは、酒壺を持つ持ち方として大げさに思える。そんなにしっかり持たねば持てぬ酒壺なら、かなり大きく、杯につぐのが難しいのではなからうか。徳利ならなおさら大げさすぎて変である。いずれにしろこれは普通ではない。比喩をこめた陰語ではなからうか。穂足りの意味をかけて、めでたい語として使っているのかも知れない。

周知のように『紀』の童謡は、元歌とは別に寓喩をこめた歌謡として利用されている。例えば、

岩の上に 小猿米焼く 米だにも 食^たけて通らせ

山羊の老翁(皇極紀二年十月)

という歌は、

時の人、前の謡の応を説きて曰はく、「岩の上に」といふを以ては、上宮に喩ふ。「小猿」といふを以ては、林臣に喩ふ。林臣は入鹿也。「米焼く」といふを以ては、上宮を焼くに喩ふ。「米だにも食けて通らせ山羊の老翁」といふを以ては、山背王の頭髮斑雜毛にして山羊に似たるに喩ふ。又その官を棄捨てて深き山に匿れし相なり」といふ。(同十一月)

とある。また、顕宗紀の億計・弘計二皇子発見の説話にある、

稻蓆 川副楊 水行けば 靡き起き立ち その根は
失せず

という歌謡は、後に顕宗天皇となる弘計王が自分達の血统は絶えないと寓喩している。「ほだり」の歌を寓喩ととってもおかしくない地盤はあるのである。

私は、次の袁杼比売の歌との関係からいって 直木説に賛成し、セクシャルな意味をこめた陰語ととりたいたいが、いかがであらうか。豊楽の宴にセクシャルな歌はつきもので、ないのがかえて不自然である。八千矛神の求婚の場に出る神謡には、セクシャルな表現がみられる。『おもろさうし』の神謡、「きみがなし節」(六卷三〇六)や「いちのなよりきよがさはねよらさふさが節」(二五卷一一一五)等に類似のセクシャルな表現があり、

外間守善は農耕祝祭の神遊び歌として⁽¹⁰⁾いる。セクシャルな表現は、聖なる豊穰の予祝祈願からくるものであり、この雄略記にもふさわしい。

日本の古文獻で「ほだり」やそれに類したものを、性的なものと結びつけた例を見出せないでいるが、徳利に相当する英語ボトル (bottle) には、動詞としての用例にそれがあるようだ。

To coit with (a woman); to impregnate (A Dictionary of Slang and Unconventional English Vol. II: The Supplement by Eric Partridge)

これによると、動詞としてのボトルは、「女性と性行為すること」や「妊娠させること」をさすらしい。⁽¹¹⁾ 英語の陰語をすぐ日本語に結びつけるのは、軽率のそしりを受けそうであるが、比較文学の見地からはこれに類したことがあるのだから、あながち無謀ともいえない。また、日本語の諺に相当する英語の諺もあるから、彼我の言語表現に対応性のあることは、不思議でもない。⁽¹²⁾ なにぶん用例が乏しいから、きめつけられないのは残念である。しかし、男性器ととると、場にふさわしく、後歌ともぴったり呼応する。

天皇の歌は、陰莖をしっかりとつかむこと（女性が男性をしっかりと受けとめること）を寓喩する陰語ではなからう

か。いなび妻である袁杼比売との性愛を示しており、聖婚による豊穰予祝を、さらにさらに強力なものとする寿詞とみられる。こう理解するとこの一首の歌語りが、見事に緊密な構成でできていることに気付く。つまり、先のⅡⅢの王権繁栄の寿詞に続き、天皇といなび妻との聖婚によって、稲穂豊である天皇霊が呪術感染し、互いの愛の深さが豊穰をより一層約束されることになるめでたさを、予祝していることになるわけである。

こうして、天皇の歌に答えることになる次の袁杼比売の歌が、極めてスムーズに理解できる。袁杼比売は天皇の誘いに応じ、「脇付が下の板にもが あせを」と、愛を積極的に受けとめる心を表しているのである。まさに、豊穰の約束される、めでたしめでたしの大団円となっているのではなからうか。見事な結句だと考えたい。

五

金組岡・長谷の百枝櫛を、主題として一貫するものにとらえた本田義寿の意見⁽¹³⁾に同意しつつ、『記』の編者の構想を私なりに考究し、同時に従来の読みで満足できない点を打開しようと目論んできた。

その結果、第一段落の金組岡の袁杼比売求婚譚は、豊穰予祝の聖婚の寿詞であり、祭式の時間的な展開をふま

えた起句に相当する話であると考えた。

次は、第二・三段落の豊楽の場へと展開するが、天子への王権讚美であり、王権繁栄の聖なる寿詞であって、三重の采女と皇后によって、天皇に向かつて捧げられる。このIIはIを承けた展開であって、承句に相当すると考えた。

IIIはIIと同じ王権繁栄の寿詞であるが、視点を変えて天皇が臣下に目を向け満足する心を歌う。王権の繁栄がより一層めでたく歌い上げられるわけで、形式上転句となつていと考えた。

そして最後に、聖婚した天皇と袁杼比売の、エロチックな性愛の予祝呪術の寿詞の交響が配される。これによって豊穰予祝は一段と高められ、新嘗祭の豊楽のめでたさが最高のクライマックスに達し、めでたしめでたしの大団円となる。よつて結句とするゆえんである。

こうして金鉏岡・長谷の百枝槻の歌語りは、一貫した起承転結の構成で作られたものと判断したい。ワニ氏の伝承や、海人族の天語連の伝承を、宮廷レベルで再編成して作った歌語りであり、『記』の編者の作意によるものである。柿本人麿が阿騎野遊獵歌でみせたような起承転結の手法が、次元は低いがここでも実を結んでいると考える。

『記』の編者が雄略記をこのように構想したのは、七世紀後半から八世紀初頭にかけての朝廷（特に天武持統朝）が、雄略天皇を強力な天皇霊の体現者とみ、その治政を鑑とする理念をもっていたからではなからうか。⁽¹⁴⁾ 先の諸論でも記したように、強力な天皇霊の体現者としての雄略天皇は、やや重複するが最後のまとめとして記すと、

一、天皇と名がつく以前のワカタケル大王の歌舞劇が民間で享受され、そこでは少しどじであるがゆえにかえつて民衆に愛されてきたスター的存在であったこと。そういう歌舞劇が、強力な天皇霊をもつ『記』の雄略天皇の話として定着していること。（日下の直越え、引田部赤緒子、葛城山）『万葉集』巻頭歌や『靈異記』上一の像も愛される天皇像とみられる。

二、諸豪族との婚姻や采女貢進による内縁関係・服属関係により王権を強化した天皇であったこと。（日下の直越え、引田部赤緒子、三重の采女）

三、聖地吉野での魂ふりにより、強力な天皇霊を更新し、王権を強化した天皇であったこと。（吉野）

四、土蒙の祭祀権の承認により、現人神として君臨し、強力な王権を確立した天皇であったこと。（葛城山）

五、豊稷と繁米の約束された王権をもつ聖なる天皇であつたこと。(金組岡・長谷の百枝樹)

といった理解が、宮廷と『記』の編者によって形成されていたのだと考える。

注

(1) 『古代歌謡全注釈』は「所伝では雄略天皇の歌に対する袁杼比売の答歌のようになっているが、歌詞そのものから見ると、前の歌とは無関係な歌である」とする。

(2) 居駒永幸「歌謡物語形成論」(『国学院大学大学院紀要10』昭54年3月)。本田義寿「雄略記と袁杼比売(古事記)の伝承」(『日本文学の重層性』国崎望久太郎博士古稀記念、昭55年4月)

(3) 「最古日本の女性生活の根底」(『古代研究民俗学篇I』)

(4) 「隠り妻と人妻と—万葉集の表現を考える」(『国語と国文学』昭61年11月)

(5) 「イナビツマー播磨風土記の聖婚説話」(『文学』昭46年11月)

(6) 「雄略記『金組岡』譚における歌の表現」(『城南国文』昭53年9月、『古代歌謡の構造』に所収)

(7) 「古事記を読む・4」一八〇頁。

(8) 「天語歌と纏向の日代の宮」(『古事記年報』19、昭51年)。「天語歌の成立と阿曇連」(『日本神話の構成と成立』)

(9) 「宴げと笑い」(『国文学』25号、関西大学国文学会、昭50年9月)。「夜の船出」八七—八九頁に所収)

(10) 『おもろさうし』二二二—二三三頁。(例えば「いちのなよりきよがさはねよらふさが節」は、「……又上の押笠と 下の遣り笠と 又御裳うち交わちへ 御袖遣り交わちへ 今わ繩一つ 今わ糸一つ」)

(11) 徳島文理大学文学部英米文学科、植苗勝弘氏に御教授を賜わった。感謝申し上げます。

(12) 例えば、虻蜂取らず—Between two stools you fall to the ground. 百聞は一見にしかず—seeing is believing. 井の中の蛙大海を知らず—He wich is in hell knows not what heaven is.

(13) 前掲書2

(14) 「雄略天皇の若日下部求婚」(徳島文理大学文学部『文学論叢』第3号、昭61年3月)

(15) 「雄略記の吉野」(『古事記年報』29、昭62年1月)

(16) その他として「引田部の赤猪子」(徳島文理大学文学部『文学論叢』第4号、昭62年3月)